

坂本 幸男編

「法華經の思想と文化」

三 桐 慈 海

法華經は文化の複雑な交錯を思わせる多様な内容を含み、社会に対して大きな影響力を持ち続けてきた。したがってその中にある課題を論じ尽くすということは容易でなく、各分野の学者による総合的な研究を待たねばならない。この書が総合研究「法華經の伝播史における思想と文化との連関」の成果として出版されたということは、その意味では画期的な事業であり、今後の研究のあり方を指向するものである。

本書は代表者坂本幸男博士を含む二十五人の研究者の論文を編輯したもので、第一篇「法華經とその背景史的文化の交渉」第二篇「法華經典の伝播史的形態」第三篇「法華教學の思想的連関」の三篇から成り、各篇にはインド・中国・日本の順に該当する論文が配置されて、法華經の成立から日蓮教學への法華經文化の発生と帰着を示そうと試みている。従って日本佛教史上では天台宗・日蓮宗に関連したもののみがとりあげられ、インド・中国の佛教史上では龍樹・世親の法華經觀との関連性にまで論究するに到れなかったのは「あとがき」にも記されているように、この広範囲の研究課題の中での研究成果の一部な

のであり、研究班の性格からいってもやむを得ないのであろう。又、各論文の内容は、一つの問題点を把えて深く追究したものと、該博な知識を駆使して大きな問題を概説したものとの二つの性格に大別することができ、殊に前者の内には法華經研究の新しい分野を開こうとするものもみられる。しかし各篇内での諸論文は相互に密接な結びつきをもつようには考慮されておらず、従って統一した結論も期待されていないから、全く総華的であり、一冊のまとまった書物というよりはむしろ論文集とみなければならない。それだけにこの書を利用する者にとっては、法華經に関する種々の問題が提示されるし、内容が多彩であることは、多くの分野の人々に啓蒙する所が大きいという利点もある。そこで今は利用する者の一人としての立場から順次をかえて各論文の内容を紹介してみよう。

法華經成立に関する一連のもの——本書の冒頭に掲げられる「法華經成立の背景」という標題の内には三つの論文が含まれているが、中でも「インド社会と法華經の交渉」(p. 37~66)は、持法弘教は菩薩行であると強調する法師品において、そこに用いられている法師(dharma-bhāṇaka)の語に着眼し、その語が梵本、巴利の原始經典やインスクリプションでは教団社会のどのような位置づけの上で使用されているかを調査して、dharma-dhara, -bhāṇaka, -kathikaとその意義が高揚されていく跡をたどっている。このような研究方法は新たな法華經解明の糸口を把むものである。他の二論文の中、「インド文化と法華經の交渉」(p. 3~30)は、佛陀の超越化とギーター等のイ

インド思想との連関を研究した西欧学者の論文を引用しながら、
『法華經の創見を認むべき』ものとの執筆者の意見が結論されており、「部派佛教と法華經の交渉」(p. 67~96)は、異部宗輪論等を資料とする従来の伝統的な大乘佛教成立史を紹介しつつも、法華經に使用されている用語と般若經等の他の經典との比較から、法華經の開會思想が有部を対象とするものではなく、むしろ阿含に説かれる原始佛教にかかわるものであると述べる。佛陀觀の展開は求道における教法の尊嚴視の上に起るものであること、法華經が般若系の經典と異質の要素をもっていることは、この二論文の結論において首肯せられる。次の「中国文化と法華鑽仰史の連関」(p. 97~128)は、敦煌の壁画や文書の中で經典の民間流布によって成立した変相等の中に法華經に関するものが非常に多いことを示している。そして壁画の中の法華經變相の一つに現行の法華經と調卷を異にしているものがあることに注意して、法華經調卷の多様性に言及している。これはこの經が編纂されていく過程が一時的でないことを示唆するものであろう。なほこの論文に関連して読んでおきたいのは「法華經の写經と版經について」(p. 355~374)である。ここでは日本での写經と版經に法華經が多くみられ、その写經の間に異同があつて、原本としては敦煌本と共通するものもあることに注意し、そして法華經写經の目的を七項目に分けて説明し、その中でも来世付嘱に属する如法經を時代と地域に従つて考察している。第二篇の中で法華經成立に関すると考えられるものは「インド佛教における授記思想の展開」(p. 249~282)があ

る。授記は迹門の二乗成佛を支えるものであり、ひいては法華經の万善成佛や龍女成佛に係ってくるのであるが、ここでは原始經典に使われている意味を原語的に解明して、「予言」と釈尊の「人格的記説」・「法による記説」の中で人格的記説が大乘經典に展開して法華經の成佛授記となり、佛性如来藏の思想が現われる以前に、それに代る役割を果たしたと結論している。第三篇の「インド佛教と法華思想との連関」(p. 437~465)は法華經思想は開會を本質とはしているが、一乘の意義を論究する時「佛陀の一なる人格」として、涅槃經の法身常住説に資するものであるという立場から、過去佛の釈尊授記や、二佛並坐や、湧出菩薩が未來佛として示される説話などが、釈尊を一点として過去未來に一線上に繋がるものであることを説き、以て、久遠実成から法身常住を予想する。この過去佛信仰の統一と釈尊への第一等の着眼点は、次前の授記思想の解明等と共に着実な法華經解明の一端となるであろう。

中国天台教学に関する一連のもの——第二篇の「湛然の法華經研究書の考察」(p. 311~355)は玄義釈籤と文句記の中に止観輔行の句が多く引用されていることに着眼して照合し、湛然の伝記と従来の研究に考慮しつつ言及した三注疏の成立年代考である。天台三大部を読む手引として湛然の注疏は必須のものとなっているが、摩訶止観が中心となった注疏であることと、法華文句記が最後の作品であり最も円熟した疏であるという結論は利用する者にとって注意を喚起するであろう。「吉藏の法華經解釈」(p. 283~310)には、三論の嘉祥寺吉藏の法華經解釈が、

梁の光宅寺法雲の法華義記を批判することによって成り立っているとして、その法華批判が列挙されている。これは従来から注意されていることで、これから我々が古蔵の法華觀を眺める上に、法雲自身の法華解釈の立場と古蔵の法雲批判の基礎となる思想を注意してのぞまねばならないし、そこには古蔵独自の二諦説があるのではあるが、その時の手引きとして便利である。第三篇の「法華經の宗教哲學的立場」(p. 409~426)は、天台の五時教判を中心とする教判論が歴史的事実の誤解として棄てざられたり、ドグマとして輕んぜられたりする現今に、生かされるべく理解されねばならないという立場から、先ず佛教史というものの有り方を検討して思想的な特殊性の中に位置づけ、「教える者と教わる者との間の伝達の段どり」と説明し、佛祖からの伝承を主体的に確信した佛祖の已証によって教判は組織づけられたものと試論している。「佛教教学より見たる法華經」(p. 377~408)は開会思想の分別説三と顯一真實の二面を、著者の佛教史觀である分別説と中道説の関わりとして理解し、原始佛教から法華教学成立までの佛教学の流れに於て論究する。本文の分別説を対法研究と実践菩薩心に、中道説を分別説に対する主体性に配当し、有・無・空の三分別が転入(sampattati)として「佛教眞実へ果遂」するという熱意ある骨子は、次前の教判論と共に初学者に「読を勧めたい」。「什訳法華經の社會学的研究」(p. 427~436)は法華經が他の經典と異つて「人間を肯定するだけでなく、世俗的な人間生活そのものをも、一定の条件のもとにおいて肯定している」と著者の佛教社會学という意

図的な立場から法華經の内に浮彫りにされている人間性を示そうとする。先ず經典の内に扱われている凡夫声聞・緣覺の否定されるべき姿を類型化し、法華經の意圖する人間像が從地湧出品に示されるような娑婆世界の菩薩であり、地から湧出するような人間でなければならないと、佛道を実践する人間の姿をそこに求めようとする。「中国哲學と法華思想との連関」(p. 463~486)は中国思想の内で佛教を受容したのは老莊の思想であることを、道家の渺と佛教の妙との関連において、また佛教の法華經とその疑似經である道教の靈寶經との関連において述べる。そして佛教受容を拒否した儒家が法華經の中にみられる數量の膨大さを取りあげて非難している点を把えて課題としている。

「中国佛教と法華思想の連関」(p. 489~549)は中国における法華經鑽仰者の名が四朝の高僧伝から抜き出されてその事蹟が列挙されているので参考とするのに便利であろう。次に法華教學の中心課題となつてきた開会思想と權実二智論を、現存する法華經疏を資料としつつ道生から法藏までに亘つて概説している。次の「中国天台と法華思想の連関」(p. 549~668)では転業思想と普門品の關係が述べられる。中国佛教の中で育まれた頓悟説は、その發生を道生の法華經理解にみることででき、佛教學界に大きな影響を与えるが、頓悟とは現在における成佛の確信を得ることで、従つて業・輪廻からの超脱である。本論ではその超脱の媒介となるものに称念があり、業並に業道を肯定しつつ尚業の束縛より超脱しようと試みている」ところに法華經成立の特異性があるとし、転業の役割を持つ称念と即得

解脱の文との関係を、普門品の念彼観音力の文の上で考察する。

日本佛教に関する一連のもの——「古代社会における法華教団の展開」(p. 129~166) は、伝教大師最澄とその門下が、新学派天台宗を日本に根を張らせようとした努力を、年分度者・僧綱・講読師等の身分獲得と、その員数拡張の状態等に視点を置き、天台宗の教線のあり方を分析しており、天台宗教団の歩んだ道すじを眺める一つの大切な資料を提示している。そしてこれは「伝教大師と法華思想の連関」(p. 539~598)と対照すべきものである。その内容を見るに最澄の天台開宗の目的は、天台円教による三学興隆と菩薩行による人間の理想像の確立であったと考えられるが、然しそれが平安遷都に伴う国家鎮護の役割を担うようになると、戒壇の建設による国師としての僧侶の養成が急務となってきた、最澄の教学が戒に定慧を具した戒中心のものとならざるを得ない要素を持つてくる。この人間の国家的理想像を作りあげるための菩薩円頓戒と法華経の関連性を述べ、正依法華傍依梵網となるあり方の必然性を示している。「中古天台と法華思想の連関」(p. 599~623)では日本天台が定着して後の動向を、観心主義思想の発展の上に時代区分し、宗内分派と相互の教学論争を思想面から取りあげ、天台浄土教の思想的な位置づけを論究しようとする。

日蓮宗に関する「一連のもの」——「中世近世及び現代社会と法華教団との交渉」(p. 167~202) 法華宗と呼ぶ日蓮開宗の教団も、日蓮在世中はその足跡の範囲での信者の集団であったのが、日蓮滅後宮廷武家等の政権界との結びつきや他の社会との結び

つきで拡大されていったが、そのいづれも立正安国の諫曉と祈禱、法敵斥伏の勢力によるものである。この日蓮の法華教団史を社会交渉史の時点から概説しており、その豊富な資料は利用されねばならない。「日本における法華信仰と殉教史」(p. 203~232) 不受不施派の地下組織は、隠れ念佛と共に政治弾圧によって強固となり、民衆に根深く結びついてきたもので、未だ全貌を明かにしたとはいえない。この一派は安土宗論で信長に流罪を命ぜられた日奥の流れを汲む、日蓮の純粹潔白さを受けついだ人々によって形成されている。ここでは先づその弾圧の経路としての法華教団の宗内の論争とこの一派の教法護持の努力を述べ、次に殉教した流罪僧の心情を浮彫している。前章に続く教団史の一断面であると共に、法華経が具有している一性格を思わせるものである。「日蓮聖人と法華思想との連関」(p. 623~639) 日蓮宗の摂受・折伏論は、宗学にとって重要な課題である。この摂受と折伏の関係は三論宗の破邪と顕正に比するものであるが、それを実践体系として表面に打出した所に日蓮宗の特質がある。本論ではその教学の裏付けとして、勝鬘経の摂受正法の顕揚とその裏面の折伏の文や、智顗の法華玄義の文等のあり方を眺めて、法華経に内蔵されている摂受・折伏思想を見出そうと試みている。「日本近世における法華思想の展開」(p. 639~650) これは先の第二篇に収められている教団史に対して、近世に限って教学史的に眺めたものである。日蓮宗は教団の形成と共に檀林がもたれ、そこを中心として活動してきた。従ってその檀林の学風によって日奥のような純粹潔白な風格が

作られたり、逆に温厚な教学偏重派が現われたりする。ここでは近世学派の系譜が述べられる。

書志に関する一連のもの——「日蓮宗における法華経研究について」(p. 651~704)がある。ここには「日蓮宗における法華経関係文献目録」が附記され、日蓮宗の法華経関係の書物と、その性格が網羅されていることは特筆すべきことであろう。な

おこれに関連して第二篇には「法華経伝訳とその形態」(p. 227~248)があり法華経が世界の各国に流布していることを知らせてくれるし、第一篇の「インド文化と法華経の交渉」も西欧学者の法華経研究の論文が註記されていて啓発される所大きい。

(昭和四十年三月 京都平楽寺書店 A 5、四〇〇〇円)